特　集　未来展望（随想）

エネルギー・資源学会事情—15年が過ぎて，今—

The Present Circumstances and Future of Japan Society of Energy and Resources

川　上　佳寿子*
Kazuko Kawakami

二昔前，わが家のトイレットペーパーを確保するために日本中が騒ぎ，探し，行列を作りました．医療衛生用品の卸売業を営んでいた我が家では，日頃は売れそうにない商品まで売れてしまい，慌ただしくしていました．当時小学生だった私は，オイルショックなどという言葉にはさして関心もなく，その次のお正月家族で伊勢に旅行したのは，トイレットペーパーが売れたからなのかな？と子供心に感じたことだけが記憶に残っています．第2次オイルショックにいたっては，すでに高校生だったのですが，思いだそうにも，そんな事があったのかどうかさえ意識になかったようです．そういえばどこかアラブの国が石油を売ってくれないのだと，テレビか何かで聞いたような気もするのですが…．

二度の石油ショックは，些少のエネルギー資源しかもたない我国にとって，いかにエネルギー・資源に関する諸問題の解決に取り組んでいくことが重要であるかを再認識させました．政府はサンシャイン計画をはじめとする諸計画や科学研究費によるエネルギー特別研究を進めてはいたのですが，従来通りの政府の監督下で行われる産業界から学界への，また逆に学界から産業界への協力による脆弱な研究体制では，広範囲に亘るエネルギー資源対策を満たしていくことは困難だったでしょう．今まさに必要なのは官・学・産業界の力の結集であり，それが総合的解決への足がかりとなるであろうことは，研究者たち自身痛感していたに違いありません．

オイルショックの冷めやらぬ昭和55年4月，官・産・学三者の緊密な協力関係を育み，正確かつ広く新しい情報の交換と自由な討論そして技術交流の場となるべく，エネルギー・資源研究会は設立されました．

「水科教授（第二代会長，故人）は例によって，大雑把なしかし自信をもった話し方で，熱心に説明され，実務は関西でやるが全国的なものであるから会長になれという」ので，当時東北大学学長の前田四郎先生は，初代会長に就任を決意されました．大阪科学技術センターで行われた設立総会に臨み，会場に集まった150名の同憂の士に驚かれ，自らの責任の重さを改めて感じられたのだそうです．

正会員105名，特別会員30社でスタートし，5年後には正会員約1,700名，特別会員約140社と，目を見張らんばかりの急成長ぶりを見せています．

専門・業種・地域の異なる会員にとって，最も直接的かつ現実的な情報交換・技術交流の場となるのは，講演会等の行事です．昭和55年度事業報告をみてみますと，1年間に開催した主催行事は講演会と講習会，5回の研究会（当時は研究部会），参加者はのべ376名にすぎませんでした．しかし，数年後には従来の行事に加え，さらに地方講演会，研究発表会，コンファレンス，見学会を開催し，参加者は1,000名を上回っています．

原油の供給が順調になり，石油価格が安定してきたこの頃，あんなに騒ぎ，不安に感じたことも忘れ，エネルギー・資源問題への関心や情熱は失われつつあるかの様でした．当時の水科篤郎会長は，「エネルギー事情が一応安定している現在こそ，落着いてエネルギー問題を論じ，将来に備えるよい機会です」，だからこそ「本会の役割はますます重要になって来ている」と言われています．

にも関わらず，昭和61年3月正会員1,768名をピークに正会員は減少していきます．とうとう平成元年末には1,500名になってしまいました．特別会員は減りはしませんでしたが，増えもしません．まさに「喉元過ぎれば熱さを忘れる」なのでしょうか．どうすれば関心を寄せることができるのか，入会者を増やせるのかと模索している中，エネルギー・資源研究会に，ひとつの大きな転機がやってきたのです．

*エネルギー・資源学会 事務局主任
〒550 大阪市西区京町堀1-9-10（帽子会館）

創立10周年を迎え，平成２年４月エネルギー・資源研究会からエネルギー・資源学会へと名称を改めました．

改称したからでしょうか，はたまたご多分にもれずバブルの御蔭なのでしょうか，これを境に正会員，特別会員ともにその数を急激に増していきます．

また，時を同じくして地球環境に関する問題が急激に浮上してきました．もちろん，エネルギー・資源問題とは切り離すことの出来ない重要な問題です．しかも急を要するといっても過言ではない程，地球環境は破壊されつつあるのです．缶・ビン・紙類の分別収集が始まる，毎年冬が暖かくなっていく，専門家でなくとも，日々の生活の中ですら気にかけざるを得ない状況になってきています．国内のエネルギー・資源に対して薄れてきていた関心が，多くの人の心中に地球規模のエネルギー・資源・環境として再び大きく強く呼び起こされたのでしょう．

昨年度末には特別会員は200社を数え，正会員においては，長年の目標であった2,000名を達成する事ができたのです．

会員層が広がり，厚みを増すにつれ，活動内容が充実されていくのは当然のことでしょう．現在では，先の行事とさらに基礎講座，研究部会を加え，年間約1,500名の動員を促し，機関誌「エネルギー・資源」は，発行部数3,000部に達しています．

が，エネルギー・資源というあまりにも広く大きなテーマのもとに，最新の情報・技術に細心の注意を払い，時機を逸さず，しかも会員諸氏の関心を呼び起こし，満足させる，そんなアイデアが泉の様に湧き出るとは到底考えられません．役員委員をはじめとする多くの方々の努力と協力にほかならないのです．

創立15周年記念祝賀パーティー会場にて
三井恒夫会長，田中郁三前（第３代）会長と

ところで，エネルギーも資源もほとんど無いわが国において，唯一の無尽蔵なエネルギー・資源，世界に誇れるエネルギー・資源といえば「人」．

にもかかわらず，エネルギー・資源学会には未利用な「人」エネルギーがある事に，どれだけの人が気付いておられるでしょう．

機関誌「エネルギー・資源」は創立当初より刊行され，本号をもって第16巻１号，通巻89号となります．巻頭言から編集委員会だよりまで15年間に計1,680編の論文を掲載してきました．その執筆者の中に女性が何人いたかご存じですか？わずか１％にも満たない，たったの13人です．（名前だけで性別を判断しましたのでまだこの中には男性がいるかも知れません……）講習会等の講師として招いた300人以上の中でも４人だけ．数えてみて愕然としました．「女性だから」選ばれるというのも釈然とはしないものですが，男性の持つ“緻密さ”，そして女性のもつ“大胆さ”．お互いにとって不可欠なものだとは思われませんか？

同じく未利用エネルギーといえばもう一つ，「若さ」があります．わかってはいても実現していく事は，非常に難しいことです．しかし，それは決して世代交替というのではないのです．少なくとも当学会では違うのです．ベテランからは，その経験から生み出される“知識や技術”を骨の髄まで搾り取らせてもらいましょう．若手からは，若いからこその“生意気で新鮮な力”を存分に発揮してもらいましょう．

そうして老若男女の混在する中にこそ，エネルギー・資源学会が目指すところの「生き生きとした問題への取り組み，のびやかな運営」が実現できるにちがいないのです．

現在，事務局は規約にある通り大阪市西区にあります．すぐ南には靭（うつぼ）公園という東西に細く続く公園があり，四季折々の花を楽しませてくれます．帽子会館という不思議な名前のビルの１室が事務所です．

エネルギッシュな関西の地から生まれ，そして日本中の多くの人の手で育まれてきました．いまや，活動は全国に及び，さらにその勢いは世界にも及んでいくにちがいありません．

16年目を迎えます．いつまでも若々しく勇猛果敢なエネルギー・資源学会であってほしいと願っています．